

小保戸遺跡 B 1 層下部における 遺物集中地点の形成に関する再検討

森ゆき乃

1. はじめに

小保戸遺跡は近世、中世、奈良・平安時代、縄文時代、旧石器時代にわたる遺跡である。旧石器時代第3文化層はB1層下部を出土層位とし、このうち第7～10号遺物集中地点では石器群、礫群、炭化物がまとまって出土した。各遺物集中地点では礫群が円を描くように検出され、その内側に石器や炭化物が出土する分布状況から、これらのまとまりが当時の住居の痕跡である可能性が指摘されている（栗原2011）。

そこで、分布状況に加え、石器組成や接合関係などの視点から第7～10号遺物集中地点出土の石器群について再検討を行い、その形成要因について考える。

2. 遺跡の概要

（1）小保戸遺跡の環境

小保戸遺跡は神奈川県相模原市小倉に所在し、一般国道468号（さがみ縦貫道路）建設工事に伴い、2007年から2009年まで約2年の間発掘調査が実施された。

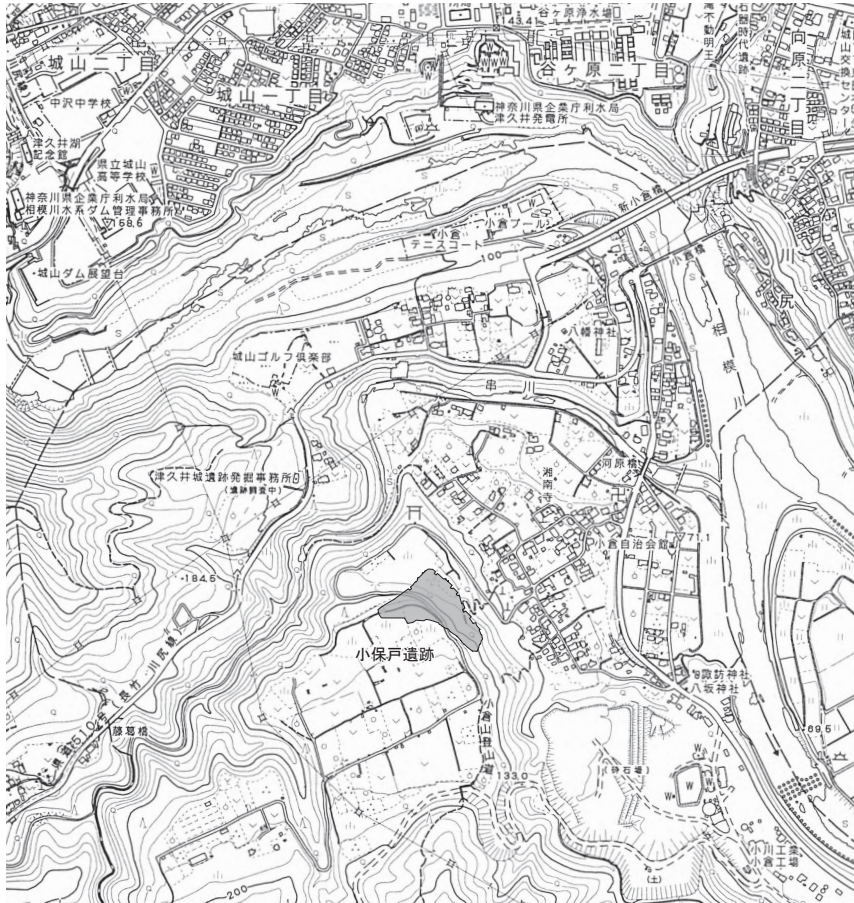
西側には津久井地域の山々が連なる一方で、東側には相模野台地が広がっており、ちょうど山間部から平地への出口付近に遺跡が存在する（第1図）。また、北側には串川が流れており、付近で東側を流れる相模川と合流する。串川によって形成された河岸段丘面は相模原面、田名原面、陽原面の3つに区分されており、本遺跡が位置するのは田名原面上である。段丘面は三角形状を呈し、標高は130m、串川との比高差は50mほどである。

調査地点の北西から南東にかけては串川や相模川に向かって下る急斜面が形成され、南側には上位の段丘面との段丘崖が存在する。さらに、旧石器時代には調査区南端部には埋没谷があり、周辺地域からの独立性がより高くなっている。

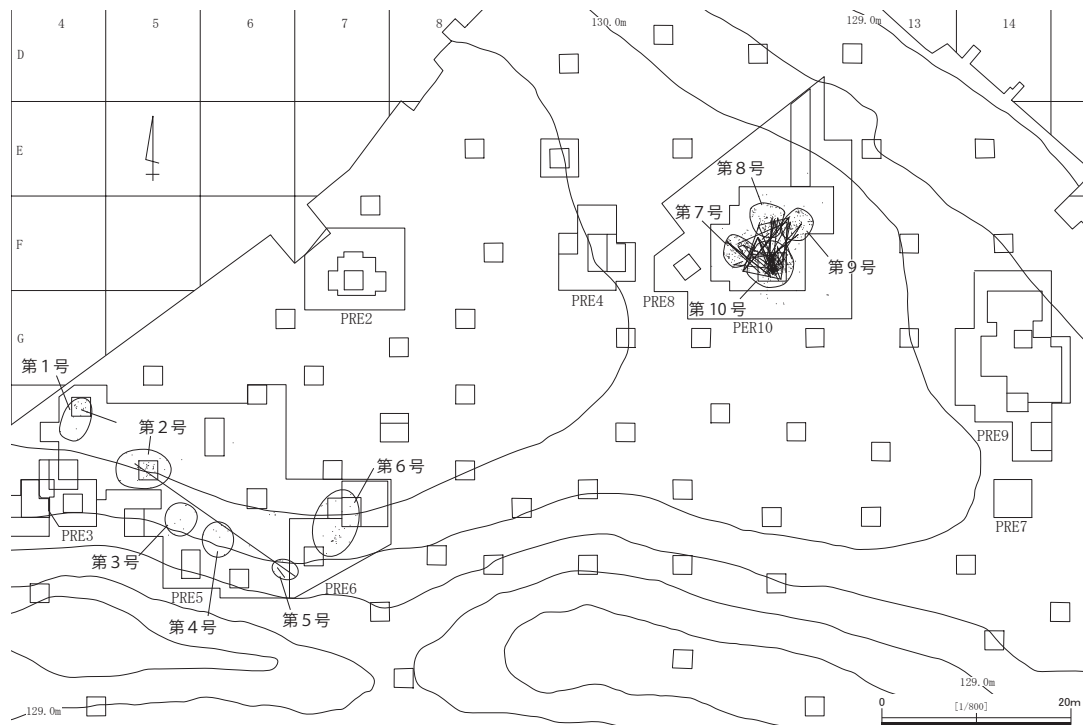
（2）小保戸遺跡第3文化層

旧石器時代の調査ではL1HからB1上部、B1下部、B2Uまで4つの文化層が確認された。第3文化層はB1下部を中心出土層位とする、約23000年前のナイフ形石器を伴う石器群である。この文化層からは石器957点、礫387点の合計1344点が出土した。遺物集中地点は合計10地点確認され、大きく東西に二分され、西側に散漫な分布を呈する第1～6号の6地点、東側に比較的まとまった規模の第7～10号の4地点が分布する（第2図）。

第7号遺物集中地点は東側の遺物集中地点のうち最も西に位置する。平面分布は約3.8m×3.7mを測り、石器85点、礫139点、合計224点が出土した。第8号遺物集中地点は第7号遺物集中地点から北東に約1.4mの場所に位置し、東側には第9号遺物集中地点、南側には第10号遺物集中地点が隣接する。平面分布は約3.8m×3.7mを測り、石器57点、礫107点、合計164点が出土した。第9号遺物集中地点は第8号遺物集中地点



第1図 小保戸遺跡位置図



第2図 第3文化層遺物分布図

の東側に隣接し、南西側には約1mの距離を隔て、第10号遺物集中地点が位置する。平面分布は約3.4m×3.4mを測り、石器59点、礫52点、合計111点が出土した。第10号遺物集中地点は第7号遺物集中地点の東側に隣接する。北側には第8号遺物集中地点が隣接し、北東側には約1mの距離を隔て、第9号遺物集中地点が位置する。平面分布は約5.0m×3.8mを測り、石器690点、礫46点、合計736点が出土した。4つの遺物集中地点のなかで最も規模が大きい地点である。

3. 第7～10号遺物集中地点

(1) 分布

第7号遺物集中地点 石器は比較的散漫に出土し、炭化物は中央付近を中心に検出される。これらを取り囲むように円形に礫が分布し、この礫の外側に石器・炭化物の分布範囲はほぼ及ばない。

第8号遺物集中地点 石器・炭化物の出土はともに散漫的である。礫は石器・炭化物の外側を北西から南にかけて丸く囲うように分布する。遺物集中地点北西部分には石器・炭化物と礫との間に0.6m×0.8m程の無遺物空間が広がる。

第9号遺物集中地点 石器が全体的に散漫な出土を見せるのに対して、炭化物は遺物集中地点の中央付近を中心に検出され、縁辺部に向けて減少する。石器・炭化物分布範囲北東部および南西部において、その外側を弧を描くように礫が分布する。第7・8号と同様、ほとんどの石器・礫はこの礫に囲まれた範囲の内側で確認される。また、集中地点の北東側には僅かながら遺物のない空間が見られる。

第10号遺物集中地点 石器と炭化物の分布範囲がほぼ一致する。他の地点と同様に礫が石器・炭化物の外側に分布しているが、東側や北側にまとまった礫が見られるのみである。

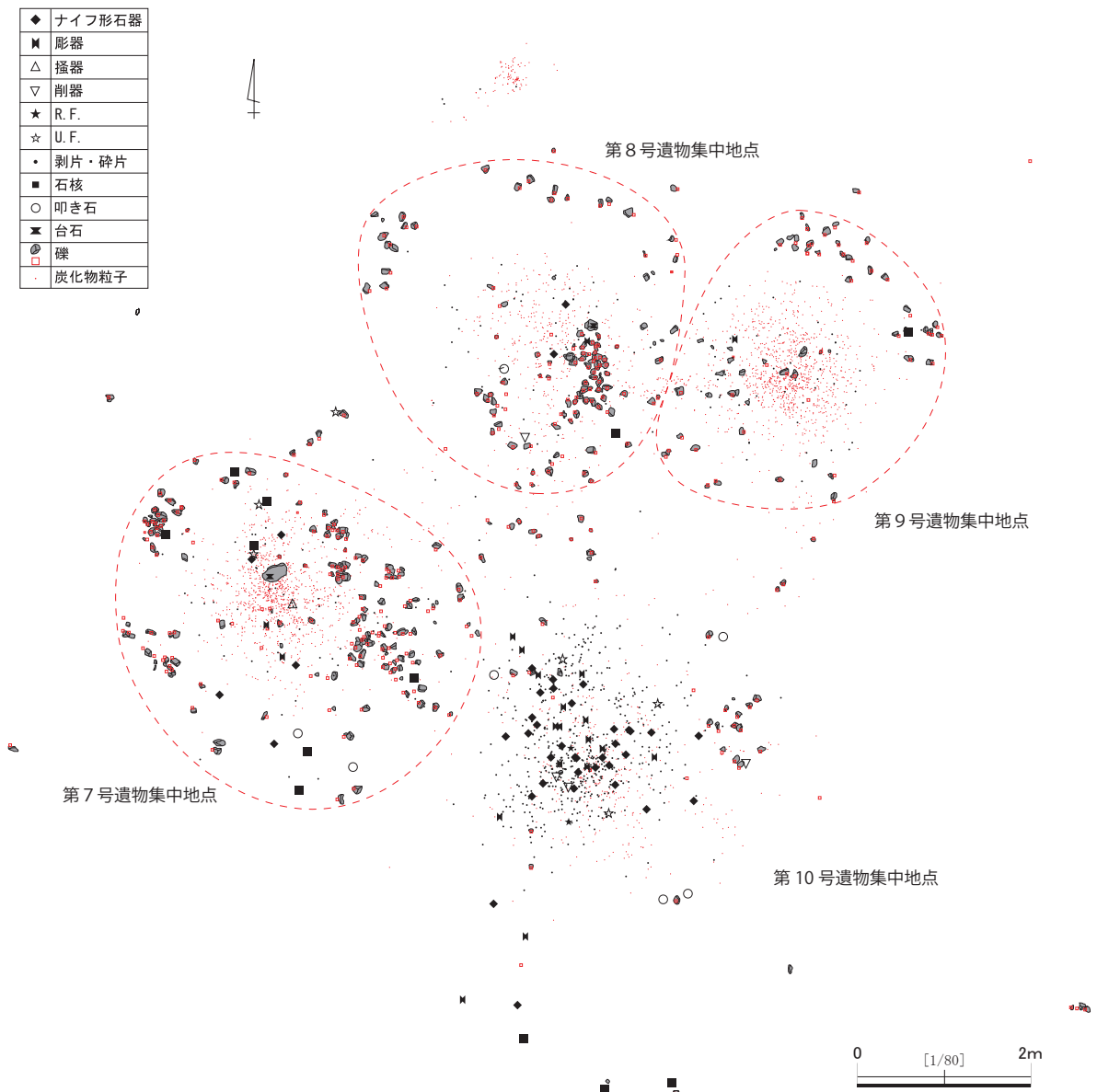
このように、第7～9号の各遺物集中地点では石器・炭化物とこれらを取り囲むように礫が円を描いて分布し、この礫の外側では石器・炭化物の分布はほとんど見られない。また、一部では礫と石器・炭化物との間に無遺物空間が確認できる。一方で、第10号遺物集中地点においても礫が石器・炭化物の出土範囲の外側に分布するものの、石器・炭化物を円形に囲んでいるとはいいがたい。(第3図)

(2) 石器組成

第7号遺物集中地点 ナイフ形石器5点、彫器2点、スクレイパー1点、微小剥離痕のある剥片2点、剥片・碎片65点、石核7点、叩石2点、台石1点が出土した(第1表)。石材は珪質頁岩やチャートが85%を占め、これに硬質細粒頁岩や黒曜石が加わる。ナイフ形石器や彫器は小形な剥片を素材とし、丁寧に刃潰し加工などの二次加工を行なう。微細剥離のある剥片は大形の剥片を素材とする。石核は小形で、90°または180°の打面転移が行われている(第4図)。

第8号遺物集中地点 ナイフ形石器1点、削器1点、二次剥離痕のある剥片1点、二次加工のある剥片1点、剥片・碎片49点、石核1点、叩石2点、台石1点が出土した(第1表)。珪質頁岩とチャートが使用石材全体の9割を占める。ナイフ形石器や削器は縦長剥片を素材とし、その一辺に連続した二次加工を施している。二次加工のある剥片は大形の剥片を素材としている。石核は90°または180°の打面転移を行い、大形剥片が得られなくなる段階まで消費が進行している(第5図)。

第9号遺物集中地点 彫器1点、剥片・碎片56点、石核2点が出土した(第1表)。使用石材のうち珪質頁岩とチャートが全体の約85%を占める。加えて、硬質細粒凝灰岩や黒曜石の他に、ガラス質黒色安山岩、



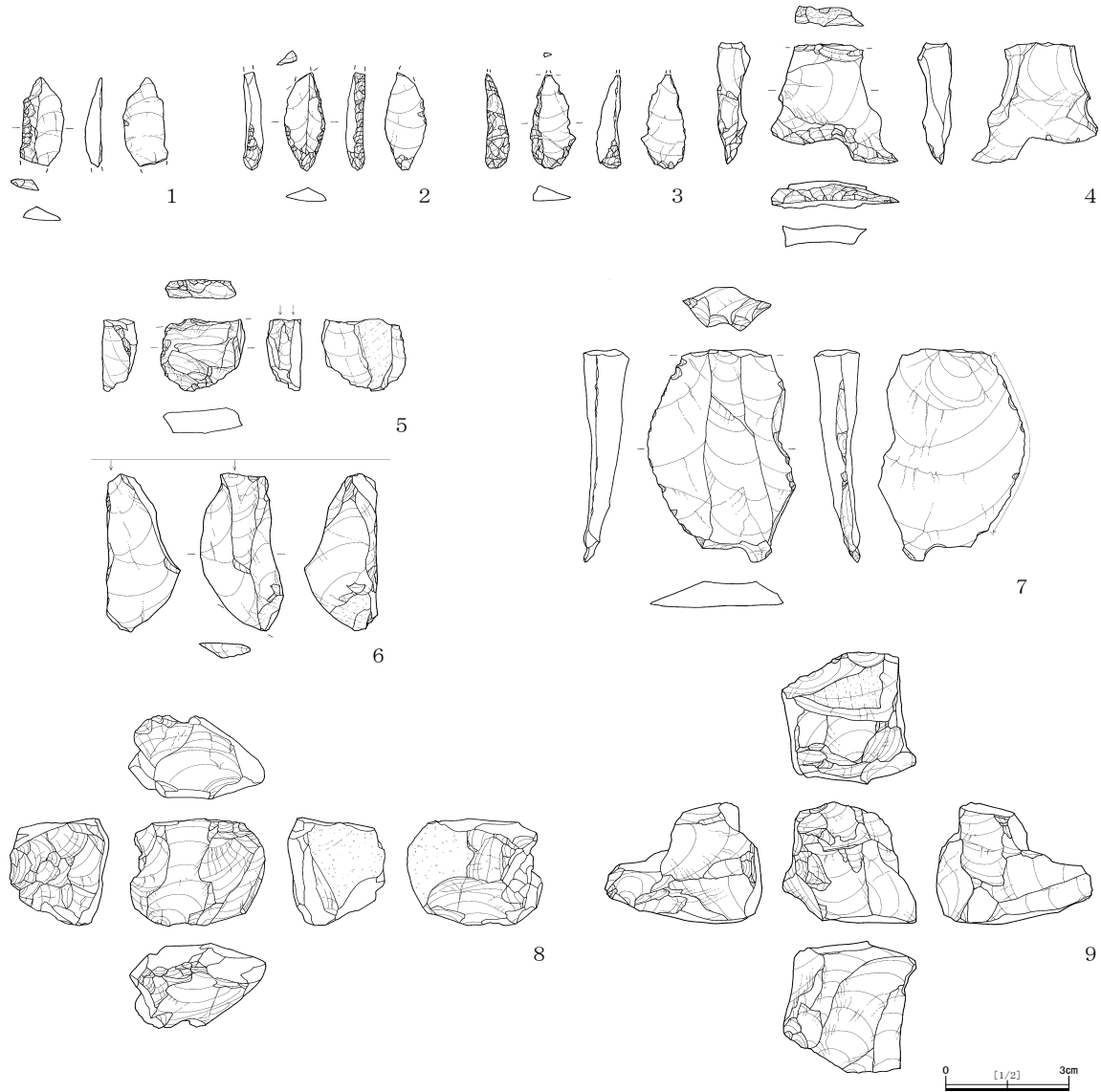
第3図 第7～10号遺物集中地点遺物・炭化物・礫分布図

第1表 第7～10号遺物集中地点組成表

		7	8	9	10
Kn		5	1		54
	S. Sh	4			41
	Ch	1			9
	HMT		1		3
	Ob				1
Gr		2		1	13
	S. Sh	2		1	7
	Ch				5
	黄色碧玉				1
削片					4
	S. Sh				3
	Ch				1
S. Sc			1		4
	S. Sh		1		2
	Ch				2
E. Sc		1			1
	S. Sh				1
	Ch	1			
R. F.			1		5
	S. Sh		1		5

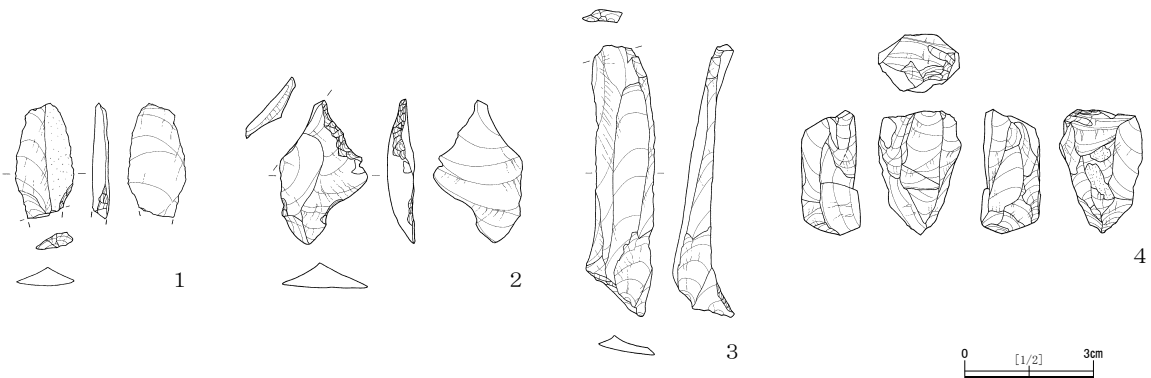
		7	8	9	10
U. F.		2	1		3
	S. Sh	2			
	Ch		1		2
	HMT				1
Fl		61	48	55	560
	S. Sh	36	28	29	396
	Ch	18	18	17	109
	HMT	5	1	4	53
	Tu	1		1	
	Ob	1	1	3	1
	G. An			1	
	Ho				1
Cp		4	1	1	42
	S. Sh	2		1	31
	Ch	2	1		9
	HMT				2
Co		7	1	2	
	S. Sh	2		2	
	Ch	4	1		
	HMT	1			

		7	8	9	10
叩石		2	2		4
	Tu				2
	An	1	2		
	富士玄武岩	1			1
	砂岩				1
台石		1	1		
	Tu	1	1		
石器		85	57	59	690
礫		139	107	52	46
	Tu	77	66	28	19
	An	43	25	13	19
	富士玄武岩	1	1		
	Ba	2	2	1	3
	ドレライト	7	4	2	1
	砂岩	4	6	7	2
	Dio	3	3	1	1
	閃緑班岩	1			
	石英				1
	?	1			
計		224	164	111	736



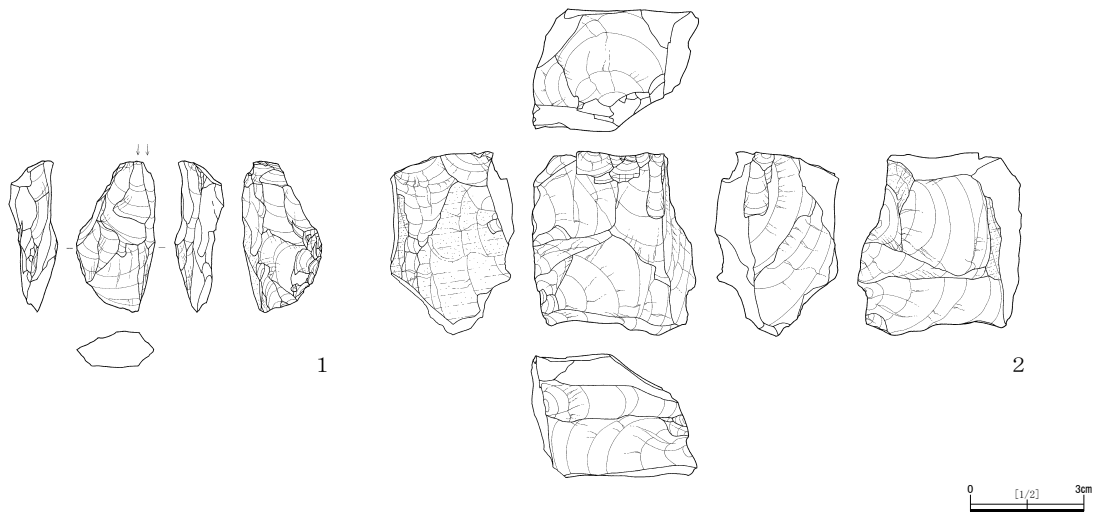
第4図 第7号遺物集中地点出土遺物

1～3：ナイフ形石器 4：搔器 5・6：彫器 7：微細剥離のある剥片 8・9：石核
(1・2・5～8：硬質細粒凝灰岩 3・4・9：チャート)



第5図 第8号遺物集中地点出土遺物

1：ナイフ形石器 2：削器 3：二次加工のある剥片 4：石核 (1：硬質細粒凝灰岩 2・3：珪質頁岩 4：チャート)



第6図 第9号遺物集中地点出土遺物 1：彫器 2：石核（1・2：珪質頁岩）



第7図 第10号遺物集中地点出土遺物
1～6：ナイフ形石器 7～10：彫器 11：削片 12・13：削器 14：二次加工のある剥片 15：微細剥離のある剥片
（1・5：硬質細粒凝灰岩 2・4・6・9・12・13・15：チャート 3・7・8・10・11・14：珪質頁岩）

中粒凝灰岩が僅かに用いられる。彫器は縦長剥片の上部に打面を作り、右側縁部付近に2枚以上の彫刀面を作出する。石核は90° または180° の打面転移を行っている。(第6図)。

第10号遺物集中地点 ナイフ形石器54点、彫器13点、削片4点、スクレイパー5点、二次加工のある剥片5点、微小剥離痕のある剥片3点、剥片・碎片602点、叩石4点が出土した(第1表)。4つの遺物集中地点の中で最も出土点数が多く、特に剥片・碎片が目立つ。削片は全て彫刀面作出に伴うものである。珪質頁岩とチャートが使用石材全体の91%を占め、硬質細粒凝灰岩を加えると全体の99%となる。ナイフ形石器は小形の剥片を素材とするものが中心だが、彫器やスクレイパーなどの他のツール類では小形の剥片だけでなく、大形の剥片も用いる。二次加工のある剥片や微小剥離のある剥片も同様に、大形剥片だけではなく、小形の剥片も素材とする。また、他の遺物集中地点と異なり、自然面の残る資料や破損した資料が多く見られる(第7図)。

それぞれの地点における器種および石材組成比、製作技術は大きく変わらない。しかし、第7～9号遺物集中地点では小形剥片に丁寧な二次加工を施したツール、大形剥片類、消費の進んだ石核が見られるのに対し、第10号遺物集中地点ではツールの素材剥片や剥片類に大きさの傾向が存在せず、石核は確認できない。さらに、出土総点数が極めて多いほか、自然面の残る資料や破損した資料も多くみられる。

(3)接合資料および母岩共有状況

接合 No. 91 剥片23点からなる(第8図)。楕円形の円礫を素材とし、90° または180° の打面転移を繰り返しながら、剥片を剥離している。初期から最終段階までの資料が第10号遺物集中地点から出土していることから、主にこの場所で剥片剥離作業を行っていたと考えられる。また、剥離作業の途中で発生した一部の剥片は第7・8号遺物集中地点へ持ち出されている。

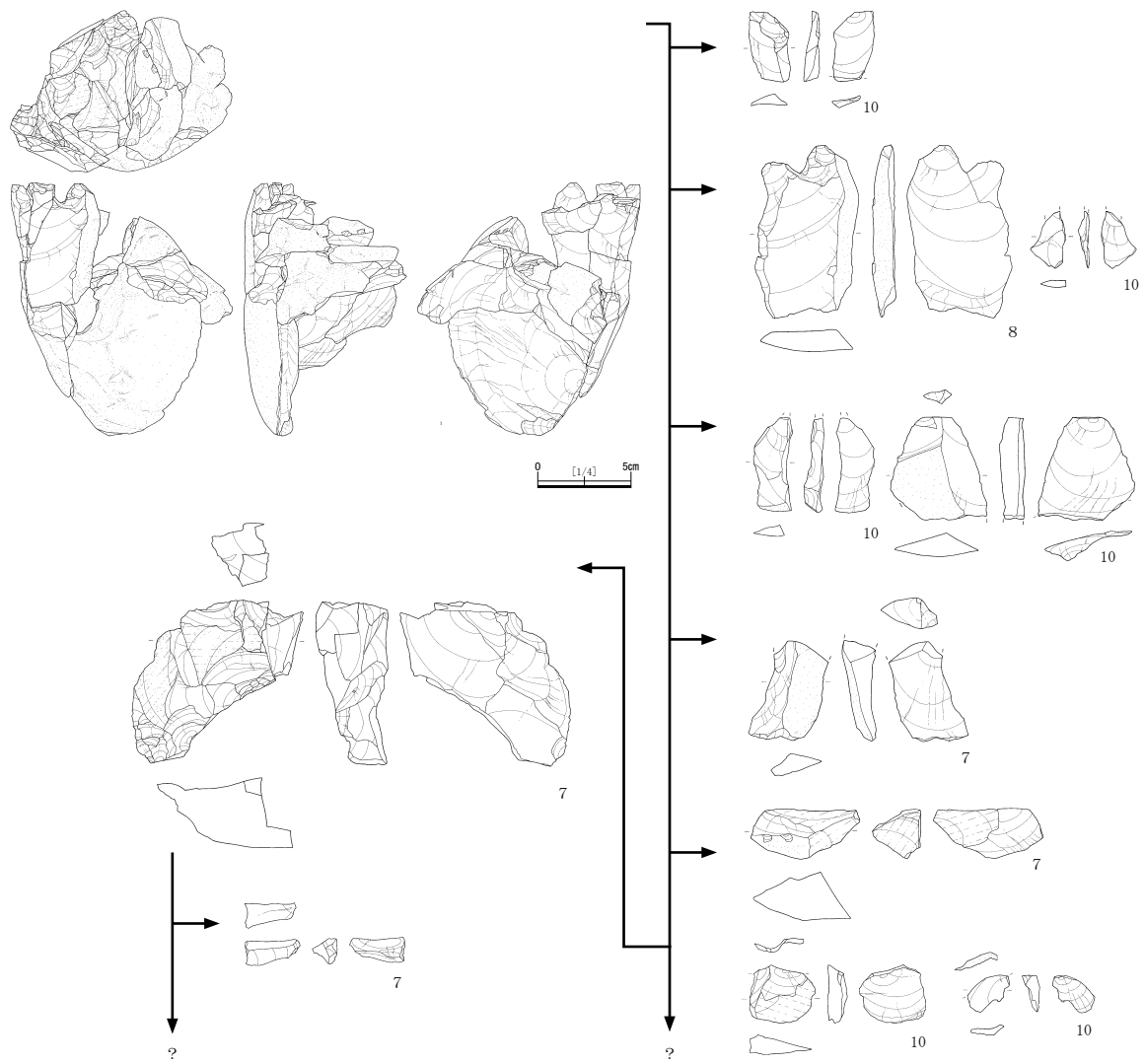
接合 No. 95 微小剥離のある剥片1点、剥片1点、石核1点からなる(第8図)。微小剥離のある剥片の素材剥片を剥離した後、剥片剥離を行う。剥離された剥片2点はいずれも第10号遺物集中地点で検出され、残核は第7号遺物集中地点から出土した。第10号遺物集中地点を含むいずれかの地点で石器製作を行い、最終的には第7号遺物集中地点において製作を行なった可能性が考えられる。

接合 No. 112 剥片1点と石核1点からなる(第8図)。剥片は第10号遺物集中地点、残核は第9号遺物集中地点で確認された。少なくとも、石器製作の最終工程は第9号遺物集中地点で行われたと考えられる。

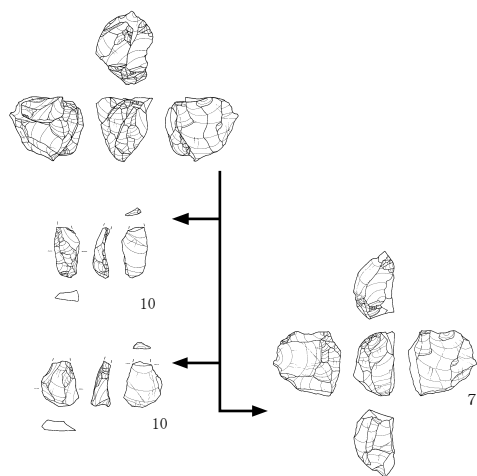
これらの接合資料では第7～9号遺物集中地点において石器製作工程上の最終段階の作業が行われている。さらに、第10号遺物集中地点で石器製作を行い、作成した石器の一部を第7～9号遺物集中地点へ持ち出している可能性も考えられる。

接合および母岩共有状況 石器接合資料には各地点内で関係が完結するものと地点間を越えて接合するものが存在する。複数地点間での接合関係の場合、第10号と第7～9号、第7・10号と第8または9号などの事例があるが、ほぼ全ての接合関係において第10号遺物集中地点が含まれる(第2表)。母岩別資料の共有関係においても、第10号遺物集中地点が各地点で確認できるほぼ全ての母岩を有している。また、第10号遺物集中地点に見られない母岩別資料を第7～9号遺物集中地点間で共有している例は一例のみである(第3表)。

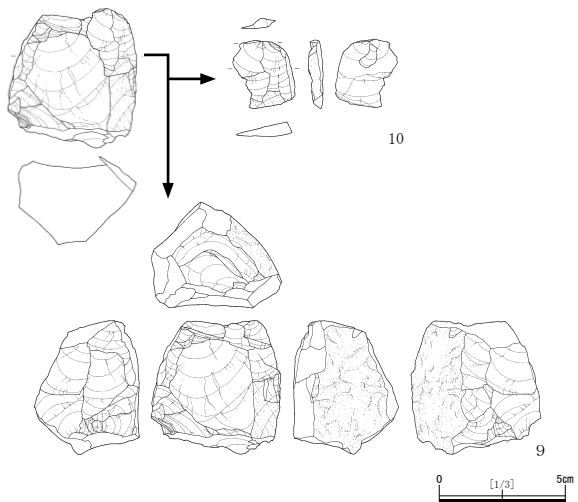
接合 No. 91



接合 No. 95



接合 No. 112



第8図 第7～10号遺物集中地点接合資料

第2表 第7～10号遺物集中地点における地点を超えた石器接合

No.	石材	器種	7	8	9	10	外
89	S. Sh	Fl	1			1	
90	S. Sh	Fl	1	1			
103	S. Sh	Fl			1	2	
106	S. Sh	Fl	2			1	
111	S. Sh	Kn				1	
		Fl	1		1		
112	S. Sh	Fl				1	
		Co			1		
113	S. Sh	Kn				1	
		R. F.		1			
114	S. Sh	Gr				1	
		Fl		1			

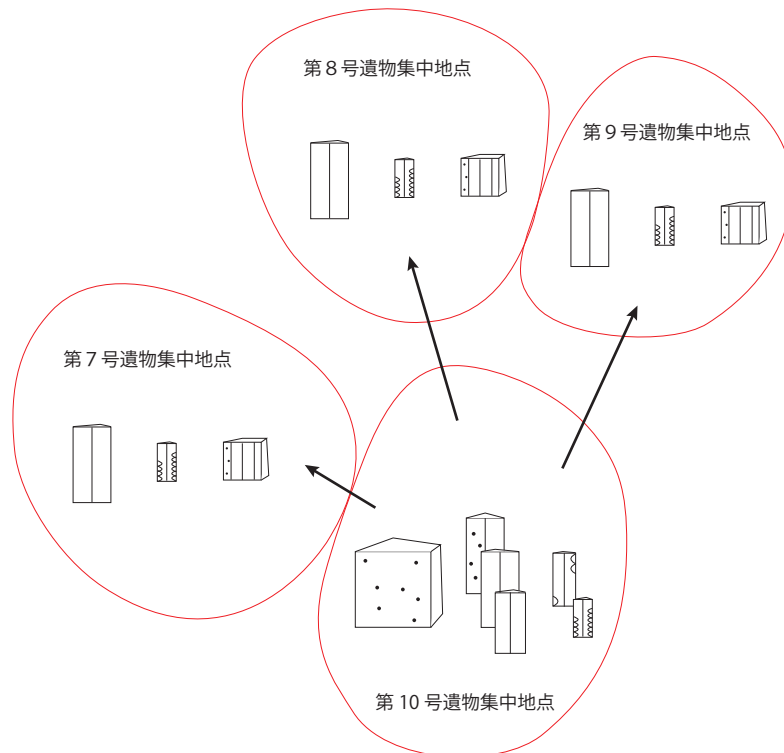
No.	石材	器種	7	8	9	10	外
115	S. Sh	Kn				1	
		Gr			1		
100	S. Sh	Fl		1			1
64	Ch	Fl		1	1	1	
		Co	1				
95	Ch	U. F.				1	
		Fl				3	
		Co	1				
99	Ch	Fl			1	1	
101	Ch	Fl	1			2	
91	HMT	Fl	4	1		17	1

第3表 第7～10号遺物集中地点における地点を越えた母岩共有

母岩 No.	7	8	9	10	外	不明
Sh4	1	1	8	31	1	
Sh5	4	2	1	25	1	
Sh6		2	3	22		
Sh7	1	3	2	20	1	
Sh8	3	3	2	20		
Sh9		1		23		
Sh10-1	19	10	1	138	3	
Sh10-2		3	4	21	1	
Sh10-3	3		5	33		
Sh11	3			18		
Sh12			1	15		
Sh13		1		12		
Sh14	1			14		
Sh16			2	6	1	
Sh19			1	3		
Sh21		1		3		

母岩 No.	7	8	9	10	外	不明
Sh23				7		1
Sh24			1	7		
Sh28		1		1		
Sh29			1	1		
Sh32	1			2		
Ch2		2	1	13		
Ch3	1	3	1	4	1	
Ch4			1	11		
Ch5		2	2	1		
Ch6	1	2	1	4		
Ch7		1		5	1	
Ch8	2	2		3		
Ch9	1			4		
Ch10	2			1		
Ch10-1	2	1	2	17		2

母岩 No.	7	8	9	10	外	不明
Ch11	3		1	11		1
Ch12	3	1	1	10		
Ch13	2		1	5		
Ch14	1			4		
Ch15				6		1
Ch16			2	5		
Ch22	1	1	2	1		
Ch23		1		1		
Ch27	2	3		1		
Ch31				8		1
Ch38					1	1
HMT1	5	1	3	40	1	
HMT4		1		5		
Ob10-1			3	1		
Ob10-3	1	1				



第9図 石器移動模式図

4. 第7～10号遺物集中地点の形成

第10号遺物集中地点では多くの剥片・碎片や削片が出土し、自然面を残すものや大形から小形のものまで様々な製作段階上の資料が存在する点から、他の遺物集中地点よりも石器製作を盛んに行なっていたと考えられる。器種組成・石材組成・製作技術は4つの遺物集中地点で共通しており、遺物集中地点を越えた接合関係や母岩共有関係において、第10号遺物集中地点が含まれないものはほぼ存在しない。加えて、接合No. 91のように、第10号遺物集中地点で石器を製作し、他の遺物集中地点へ持ち出したと考えられる資料がある。これらのことから、主に第10号遺物集中地点において石器製作を行い、第7～9号それぞれの遺物集中地点へ製作した石器を運び出していたと考えられる（第9図）。

また、第7～9号遺物集中地点では丁寧に加工された小形のナイフ形石器・大形の二次加工や微細剥離のある剥片・石核というように出土する石器に一定の共通属性が見られる。つまり、完成されたツール・大形剥片・石核を選択して持ち出し、その先で、ツールは使用され、大形剥片や石核は新たなツールや剥片の製作を目的として持ち込まれたのではないだろうか。

5. おわりに

小保戸遺跡 B1層下部で確認された第7～10号遺物集中地点について、石器組成や接合状況を中心に検討を行った。第10号遺物集中地点と第7～9号遺物集中地点では性格が異なり、前者で石器を集中的に製作し、必要な石器をその周囲にある後者へ持ち出していた可能性が考えられる。

この遺構が当時の住居であるが否かという明確な根拠は得られなかった。一方で、第7～9号遺物集中地点において、石器・炭化物を円形に囲むように礫が分布し、その外側では石器や炭化物がほとんど見られないという、礫が空間を仕切るともいえる様子は当時の住居を推察する上で重要な点であると考えられる。また、礫や被熱状況の分析から、被熱した土壌が遺物集中部内で認められる点や礫が移動している可能性が示されているほか（森永・池上2013）、礫群が調理後に廃棄されたことによって形成されたものであるとの指摘もされている（保坂2015）。今後は、被熱状況を含めた礫群の検討、さらには他の遺跡との比較検討を行い、これらの遺物集中地点の形成要因を探索していく必要がある。

【引用・参考文献】

- 栗原伸好2010「小保戸遺跡の環状分布を呈する礫群（速報）」『平成21年度考古学講座 かながわの旧石器時代のムラと住まいを語る』神奈川県考古学会
- 栗原伸好2015「基調報告 小保戸遺跡の環状分布を呈する礫群」『20種年記念事業 公開セミナー記録集「神奈川の発掘成果にみる考古学研究の転換点」－「発見」から導かれる研究の方向性－』公益財団法人かながわ考古学財団
- 公益財団法人かながわ考古学財団2013『小保戸遺跡 一般国道468号（さがみ縦貫道路相模原市城山地区）建設事業に伴う発掘調査』公益財団法人かながわ考古学財団
- 保坂康夫2015「コメント① 小保戸遺跡第3文化層の環状分布を礫群研究の立場から説明する」『20種年記念事業 公開セミナー記録集「神奈川の発掘成果にみる考古学研究の転換点」－「発見」から導かれる研究の方向性－』公益財団法人かながわ考古学財団
- 森永速男・池上雄紀2013「磁気を用いた小保戸遺跡礫群環状礫の礫と土壌の被熱判定」『小保戸遺跡 一般国道468号（さがみ縦貫道路相模原市城山地区）建設事業に伴う発掘調査』公益財団法人かながわ考古学財団